

豊根村分科会

10/12(金)

とよね文化広場 村民ホール

挨拶

豊根村長

過疎地域自立活性化優良事例発表

広島県/生桑振興会

愛知県/豊根村



改めまして、おはようございます。ご紹介いただきました地元、豊根村長の伊藤実でございます。本日は「全国過疎問題シンポジウム豊根分科会」に、村民の皆さんをはじめ、全国から多くの方々にお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。心からお礼とご歓迎を申し上げます。

今日、ここにお集まりの皆様方には、日頃からそれぞれの地域におきまして、地域活性化に取り組んでおられることと思います。日本全国、過疎といわれる地域に出向きますと、それぞれ聞かれる言葉が、一つ目には少子化、それから高齢化、後継者不足、嫁不足、それに加えて、今、大きな問題となっております有害鳥獣の悩みでございます。

しかしながら、そういった地域こそが自然環境を守り、温暖化防止、そして、心のふるさととして、大きな役割を果たしているのも事実でございます。

将来にわたって、それぞれの地域が自立していくために、共通の悩みや課題、地域の連携に向けて、情報を共有していくことが必要だと感じています。

地方財政は、ますます厳しくなる中で、それぞれの地域において、知恵と地域力を結集して、みんなが安心して暮らせる地域づくりに取り組んでいかなければならないと思っております。

今回の過疎問題シンポジウムの大会趣旨の中にもございますように、参加者同士の情報交換、交流を通して地域づくりの一助になれば、また、この会が有意義なものになることを期待しています。

せっかくの機会でございますので、豊根村の取組を紹介させていただきます。

豊根村もかつては5,000人を超えた人口でございましたが、現在は1,300人台まで落ち込んでおります。戦後、大きな、三つの節目がございました。その一つは、開拓事業への入植、その後、天竜川に建設されました佐久間ダム、そして新豊根ダムにより、多くの方が挙家離

村したことが大きな要因でした。

豊根村は、北が長野県、東は天竜川を境にいたしまして静岡県と接しております。林野率は93%でもともと豊根村は林業が中心だったわけですが、昭和50年代を境にどんどん低迷しております、今もなお、先が見えない状況が続いております。

豊根村では昭和44年に、茶臼山高原、茶臼山は愛知県で一番高い山でございますけれども、それを中心に天竜奥三河国定公園に指定されました。これを契機に豊根村は林業のほかに、観光と交流で村づくりをしていくということで、「観光立村」ということを目指してまいりました。当時は非常に厳しかったわけですが、茶臼山高原道路の開通、国民休暇村の誘致、愛知県で唯一のスキー場のオープン、それから温泉施設、最近では、平成19年度から芝桜公園の整備等ございまして、年間を通しまして雇用ができる地域となりました。

また、茶臼山高原を中心に現在60万人を超える人々に観光していただけるようになり、ようやく観光の取組が、落ち着いて定着しつつあるのかなと思っております。

そういった取組の中に、私どもは、地域にある条件、地域をどう生かしていくか、また、そのことは何のためにやるのかというような、一貫した哲学的なものが必要で、加えて、多くの方々の力を借りなければ成し得ないことと思っております。

昨日、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を授与させていただきました。豊根村では、都市との交流を、30年前から山村体験宿泊事業や地域づくりインターン事業、大学等の連携をするなかで、ようやく、豊根を愛していただける、豊根に関わっている方々に「とよねサポーターズ」というものを結成していただきました。さらには、「緑のふるさと協力隊」や「地域おこし協力隊」の受け入れを行い、地域の活性化に取り組んできたことが、評価されたのかなと思っております。引き続き、外部の人々のお力を借りながら、交流と観光を中心に村づくりに取り組んでいきます。

最後に、ただいま見ていただきました「花祭り」、このお祭りは700年の歴史がございます。700年も前から脈々と受け継がれ、今では国の重要無形民俗文化財に指定されている祭りですが、かつては豊根村の8か所で行われていました。先程申し上げましたように、佐久間ダム、新豊根ダムの建設により地区の水没などで3か所が無くなりました。平成の時代になりまして、過疎化、高齢化により維持が困難だということで2か所が

無くなり、現在では3か所がなんとか維持していただいております。

いずれにいたしましても地域の資源、文化を守り、後世に引き継いでいく、こういうことが私たちの使命とっております。

本日、お集まりの皆様には、これからも地域の自然や伝統文化などを守りながら、安全、そして活力ある、ふるさとづくりに一緒になって取り組んでいただくことをお願い申し上げ、また、そのことを皆さんで共有しながら、本会が盛大に開催されますことを心から祈念しまして、開会の挨拶とさせていただきます。

本日は、よろしくお願いたします。



広島県安芸高田市 | 生桑振興会

地域の力で暮らしを支える ～過疎地域における 自主・自立的な地域経営の実現～

生桑振興会会長 藤井 敏法

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました生桑振興会の藤井でございます。よろしくお願ひします。

私たちの地域といいますのは広島県の北部に位置しております。島根県に石を投げたら届くんじゃないかというようなところで、この時期は猪、鹿等々の獣害に大変苦しんでおります。

広島市の中心から直線距離で50キロ。今は道路網が発達しておりますので、通常の道を通っても1時間半くらいで行ける距離にあります。現在、世帯数は239世帯。人口が604人となっておりますけれど、実は、これは4月1日の人口数でございます。3名の方が他界されました。現在では601名。そのうちの75歳以上の高齢者の方が189名おられます。そういう過疎率、高齢化率の大変高い地域ということでもあります。高齢化率も48%くらいに現在はなっております。主な産業については農業、米はコシヒカリが主産米でございます。それから林業ということで、今までは農業林業で生計を立ててきた地域でございます。また、雪が大変深いということで、1メートルを超す雪が一晩に降る。除雪作業は必須ということでございます。それから伝統芸能としては神楽。それから田楽—これは花田植のことですけれども—この後に写真がでてきますのでご紹介したいと思います。

これは神楽でございます。東京公演、今年1月、東京の方に行って公演しました神楽でございます。豊作を祈ったり、豊作を神様に感謝するという意味合いで、この神楽が伝承されています。そしてこちらが、花田植。この神楽については、これ、悪役の鬼でございます。これが神様。悪を退治する役をしております。この鬼の衣装、実は70キロくらいありまして、金糸銀糸を縫い込んだ衣装で身をつつんで、かなり激しい、八拍子の踊りを踊るといふ状況でございます。この鬼一匹の衣装の値段がだいたい800万円くらいかかっております。

それでは、私たちがどういうことに取り組んだかとい

うことで、総論的な部分を、時間があまりございませんので、ざっとお話ししたいと思います。

安芸高田市には地域振興会という組織が32団体あります。我々「生桑振興会」というのは、そのうちの一つでございます。その活動目的は、市民と行政のパートナーシップによる協同のまちづくりを推進するということでございます。生桑振興会としては、できれば行政依存、行政指導から脱却しようじゃないかと。我々でできることは、我々でまずやってみようじゃないかということで、現在に至っております。その過程でガソリンスタンド、そして店舗が閉店される、と。ではどうするか、というところから今回の活動が始まったわけでございます。

生桑振興会は平成14年の9月に設立されておまして、住民の安全と安心の確保等々、こういう目的と結果を求めて活動をしております。

これは、先程言いました共同体の機能といいますか、生桑の、昔はコミュニティといわれていた団体、集落でありますけれど、65歳以上の割合が大変、安芸高田市は高い状況にあります。現在は、3万3千くらいの人口がありますけれども、5年後には3万人を切るのではないかと、安芸高田市全体においてもそういうような状況にあります。ただ、今日、新聞をこちらに來させていただく車中で読みましたら、田舎がなくなると都市が消滅するという記事が出ておりました。なるほどなと、思ったわけでございます。それで、今回の、このシンポジウムにありますように、「田舎を守ろう」というのではなしに「田舎を残そう」という気持ちを、我々田舎で住んでいる者ではなしに、都市に住んでいる人が思っただけいたらなと。その都市の方に、今日のシンポジウムの内容等々をぜひ伝えたいと思っております。

生桑の現状といいますのが、田舎でございます。もともと農業、それから林業に生計を求めていたということで、農業をするには田植えがあります、稲刈りがあります。それに一つの家、一軒の家では、とてもじゃないけど対応できない、ということで、お手伝いをお願いする。そのお手伝いをお願いして、その方に労賃を払うのではなしに、労働でお返しする。そういう地域のつながりというものがありまして、大変隣近所、人の集落、つながりが強いところでございます。現在では、道の草刈り。これは安芸高田市の市道の草刈り、それから水路の清掃なども、我々やっております。それから伝統文化の継承。この神楽というのがポイントになりますが、後のパ

ネルディスカッションのほうで、一面ではこの神楽の団員の力をお借りした分がありますので、そこのところをご紹介したいと思います。

これが、元々ありましたガソリンスタンドでございます。このガソリンスタンドは、元JAが経営しておりました。JAが撤退したあと、JAのOBの方がガソリンスタンドを経営して、隣の店舗も経営しておりました。現在では、この店舗とガソリンスタンドがこの生桑地区、私たちが住んでいる生桑地区の唯一のお店ということで残っておりました。そのガソリンスタンドと店舗が、実は閉店するのだと、閉店したいのだという問題が起きました。これは私、それまでは出稼ぎといいますか、地元におらないで、全国を回らせていただいていたわけですが、田舎に帰って、今の仕事を始めたときに、生桑振興会の会長をやってくれんかと。「会長は判を押せばいいのだ、それだけしかすることはないんだ。」と、それならやってやろうと引き受けた後に、ですね、この生桑振興会で一つ、ガソリンスタンド、店舗の存続を検討してくれんか、リードしてくれんかという話が持ち上がりました。

そして、この新しいガソリンスタンドにつきましては、実質、振興会が音頭をとったということになっております。そのなかで、特に皆さんにご紹介したいのが、地域需要に見合ったガソリンスタンドの新設ということがあります。これは、田舎はハイオクのガソリンを利用する人はあまりいない。それから、近くに車の修理工場があります。それで、パンクとオイル交換は新しいガソリンスタンドでしない、と。ちょっと横着なガソリンスタンドですけれども、これは建設費もなるべく少なくしようというところから出たものでございます。このガソリンスタンドの運営についてはですね、私どもの生桑振興会、市の行政、JAの関係が、ひとつの共同体を形成しまして、1年で運営にこぎつけたと。市の行政の方は各種、許認可の関係をお願いしました。JAの方については、いわゆる商売の、販路の、あるいは経営の資本について、ご教授をいただいたということでございます。

そうこうするうちに、実は経済産業省が「ガソリンスタンド過疎地」ということで、いわゆる、ガソリンスタンドが一定の地域からなくなったというところについては、補助を出しましょうという制度があることに気が付きました。それで、これに飛びつきました。この時にはすでに、ガソリンスタンドの設計等に走っていたわけで



すけれど、この補助制度が大変役に立ちまして。それと資金面では生桑振興会の自主財源。これは特別会計でございますけれども2,036万円、これ決算額です、これを取り崩して4,050万というガソリンスタンドの運営費用、店舗の改装費用を捻出したわけでございます。

それで、土地については、生桑振興会の承認がなくては行けない、ということがありまして、実は、この生桑振興会というのは任意団体でございますから、登記の資産がありえないということで、地縁団体生桑振興会という法人格を取得しまして、生桑振興会名義で不動産の取得の登記をしたという経緯でございます。

これが、ガソリンスタンドができる前の敷地でございます。こちらは県道の歩道面で、この高低差は1.5メートルくらいございました。ここに縄張りしてありますけれども、ここへ30キロタンクを埋設したということでございます。これが埋設風景。これが工事風景でございます。これが副会長清水勝、これが会計担当、ここにおるのが私でございます。普段は、ああいう格好をしております。これが完成前後の今年の一月、正月過ぎの景色でございます。雪吊りの雪がまだ残って、山々はまだ真っ白という状況の、大変雪深い地域でございます。そうしたことから、生活に灯油、それから軽油は欠かせない。特に除雪する機械が、このガソリンスタンドを中心に四方に道が伸びておりますけれども、それを朝3時頃から除雪をします。それでだいたい6時頃、この地区の者は近辺の大きい企業がある町へ仕事に行く、あるいは学校へ行くということで、6時頃には除雪が完了して、コミュニティバスが通る、あるいは自家用車が通っても問題ないという状況を物理的につくらなければならない。このガソリンスタンドがなくなることは、死活問題だということでございます。

灯油にしても、実は、私どもの地域は、まだまだ太

陽光発電とかが進んでおりません。いわゆる給湯にしてもすべて灯油。灯油が8割強の家庭でございませう。そうしたことから冬場の暖房、日々の給湯には、この灯油が欠かせない。これもガソリンスタンドがなくなりますと、18キロ先まで灯油を買いに行かないかん、あるいは軽油を買いに行かなきゃいかんという状況に陥るということでございます。

これは、店舗ができましたよ、ということで、今年の1月28日の風景でございます（19ページ参照）。こちらが当日、びっくりしたのですけれども、落成式を、竣工式をやっておりましたら、太鼓の音、笛の音が聞こえてくるじゃないですか。ぱっと見てみますと、有志の方が「祝込み」という30年ぶりの神輿だそうでございますけれど、これを担いで練り歩いて、酒樽をいただいたという、大変感激した一瞬でございました。

店舗の前で落成式をやったわけですが、店舗の前には、これが地元のだいたい若い人でございませう。若い人といっても平均年齢70を越えるくらいだと思いますけれども、こういう雪があるところでも集まってきていただきまして、万歳三唱をしていただきました。人々の顔を見てみますと、満面の笑顔、そして中には涙を流してくれる住民の方もおられました。

これが、私ども生桑振興会が、これまで視察を受け入れた団体でございます。トップバッターで、まだ1月26日は店舗が開店してなかったのですけれども、中国四国ブロック過疎対策担当課長、これは県知事部局の方ですが、約40名の方が視察に來られました。以下、先日の9月12日、山口の阿東の方から、20名の方が來られたということでもあります。

それで、運営形態はどうなのだとということなのですが、我々の運営形態は、生桑振興会が施設、あるいは不動産を取得しまして、公募によって経営を委託しております。公募による委託経営については「若い人でないと許可すまいで。」という裏話をしながらやっておりました。結果として、45歳の社長、それからガソリンスタンドの店長は22歳でございます。それが「株式会社ふれあい市」、出資金600万円という資本金の株式会社を設立して、現在、運営しております。それで、不動産、施設等については無償で対応して、ただ建物の工賃等については無償であるがゆえに、ふれあい市のほうで面倒をみてくれよという形でやっております。

サービスとしては、これは当然、われわれ振興会の

特別基金の2,000万円を崩しておりますので、住民の方には灯油・軽油の配送サービスをする。そして買い物についてはポイントを付与しております。それから介護福祉関連商品、これは、なかったのですけれども、市の社会福祉協議会というところと協議しまして、介護福祉商品、これも備えております。

そして、市場から直送してくる鮮魚、これも今までは、どちらかというと山の中にくる食べものは塩辛いもの、干物ということだったので、いまでは鮮魚が週に一遍入ってくるという状況になっております。それから、市特産品の展示販売というコーナーを作りまして、市のPRの一助になっておるといことです。それから配送を、電話で注文があれば高齢者について持ってあげる、と。今はついだという状況ですが、これからは、それを企画して、定時の配送体制をつくりたい。そこまで、まだ今体力ができておりませんので、今のところ注文を受けた物だけ持っていく。その際に声掛けもさせていただくということをしております。

それから、店舗の一角にサロンを設けて湯茶をおいて、お昼前に來た人は、そこでカップヌードルに湯を注いで、むすびを買って、食べてくれるという光景も見られることができます。やはり我々、田舎に暮らしておりますと、どうしても家に籠りがちだと。こういうところがあれば、そこに行けば誰かに会えるということで、結構、お年寄りの方には評判がよくて、利用していただいております。

終わりになりましたが、大変過疎高齢化が進んでおります。気象、気候、環境も、中国山地のまっただ中というところで大変な厳しい地域なのですが、その厳しさを逆手にとりまして、これから森林浴、あるいは猪が見たい人はおいでなさい、熊が見たい人はおいでなさい、というような逆手にとった活動ができないか模索中でございます。できましたら、将来にわたって安心できる地域ということで、我々は5年先、10年先のビジョンを掲げて、現在、そのビジョンの実現に邁進しておるところでございます。

大変端折った発表で、しかも時間を大変超過しましたが、生桑振興会の発表を終わらせていただきます。また詳細については、パネラーとして、私も参加させていただきますので、その時にいろいろとお話をさせていただきます。ありがとうございます。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

愛知県豊根村 | 豊根村

若者と心つないで過疎脱却

豊根村地域づくり推進室長 青山 幸一

この表彰を受けるにあたっては、今日この場にたくさんのお客様の方々にお越しいただいております。この取組は、30年来、長い間、若者を地域で受け入れてきたことが成果につながって、表彰という結果になったと思っております。本日は、私が代表して説明させていただきますが、この賞は、地域の皆さん、今まで骨を折っていただいた方々みんなの賞だと思っておりますので、そのように聞いていただけたら、ありがたいと思います。

まず、はじめに、遠くは長崎県からもご参加いただいておりますので、先程、村長からも話がありましたが、豊根村の位置から見ていただけたらと思います。豊根村は来ていただいてわかるとおり、愛知県の端に位置します。豊根村は、芝桜やスキーなど、茶臼山高原を中心に観光立村を目指しております。また、古くから林業の村であるとともに、ダムが二つあるということも特徴的な村となっております。ここにお越しいただく道すがら見ていただけたと思いますが、本当に、山深い山村でして、人口が現在1,300人ほど、65歳以上の高齢者率が45%。60歳以上の比率となりますと半数を超える方が高齢者となっております。

人口の推移を確認させていただきたいと思いますが、豊根村は、富山村と平成17年に合併をしておりますので、旧豊根地区と旧富山村と色分けして記載させていただいております。古くは、佐久間ダムの完成により、旧富山地区の人口が大幅に減りました。また、新豊根ダムの完成に伴って、今度は旧豊根地区の人口が大幅に減りました。その後、高度成長の時代を経て、過疎化がどんどんと進んでいきます。その時代に同時に起きたことが村の主産業である林業の不振です。平成17年に豊根村と富山村で合併をしましたが、合併当時の人口1,600人よりも、現在では、さらに減って1,300人あまりとなっております。状況です。

このグラフが、終戦直後の豊根村の人口ピラミッドです。全国の他の地域でも同じ傾向と思いますが、非常に良い形をしております。現在の人口ピラミッドはこのような形で、頭でっかちで腰の部分がかびれた魚のような形をしております。豊根村からは通学できる高校が

少なく、通学できる大学がないこともあり、高校生から大学生あたりが、非常に少ないという点が特徴となっております。かつての人口構成と比べると少子高齢化が進んでいることがよく分かります。

もうひとつは、「集落が危ない」ということを最近強く思っております。豊根村には約40の集落がありますが、4割以上の集落で、集落の高齢者人口比率が5割以上となってきております。14歳以下の若者がいない集落も約3割となってきておまして、いままでは、過疎化が問題だといってきたのですが、これから先は、集落の存続問題が非常にクローズアップされてくるのではないかと考えております。特に、先程実演した花祭りが最近になって2か所所で休止になったことは、集落の危機を象徴する出来事です。

このような状況の中、地域の力を育てていくためには、外部人材の活用をすれば良いのではないかと考え、平成8年から「地域づくりインターン事業」を行ってまいりました。これは、大学生に2週間程度の期間、村に滞在をしていただき、地域の持っている課題や若者の感覚から出てくる提案をしていただくものです。この事業の実施にあたっては、宿泊先が、原則民泊でして、それぞれ、地域の方々の家に泊めさせていただくことで、地域に直接触れ合い、地域の視点で考えてもらえるような場づくりを行ってきております。そうした滞在中で、いろいろなアイデアが出てきたり、地域活動の担い手になってもらったり、地域が刺激を受けたりしてきました。具体的には、集落の懇談会に参加したり、花祭りや盆踊りなどの伝統行事へ参加したり、集落の清掃や草刈り、話ではスズメバチの巣の撤去も行ったと聞いています。また、地域行事である体育祭、敬老会、交流会などにもスタッフとして参加しています。特に、三沢地域で行われていました山村宿泊体験事業のスタ



ップとして、多くの学生が大きな活躍をしました。

こうした事業を平成8年からずっと続けてきますと、学生時代にインターンとして参加した学生が、今では社会人となり、家庭を持ち、いろいろな場面で幅広く活躍をするようになってきます。そうした方々で「とよねサポーターズ」という、緩やかな応援団が自発的に組織され、影になり、表となってインターン活動の支援をいただいております。今日も、会場の入口に、愛知県立大学さんの活動の写真パネルを展示していただいておりますが、これも支援の一つです。

最近では、比較的豊根村に距離的に近い大学、愛知県立大学さん、名古屋市立大学さん、豊橋技術科学大学さんの3校が連携をしながら、豊根村の課題解決に向けた取組を進めてきております。特に、愛知県立大学さんの取組では、学生さんが地域を巡って、高齢者と会話することで、高齢者に若者の元気を分け与えるような取組を進めているところでございます。

私どもの事例は、だんだんと過疎化が進んでいく地域の中で、都市の若者が一定期間、例えば、地域づくりインターン事業であれば2週間、緑のふるさと協力隊、地域おこし協力隊であれば1年から3年という単位で地域に入っただき、いろいろな若者が持つ特徴的な能力、例えば、パソコンを教えたり、農作業労働を手伝ったり、都会から来るときに買い物をしてきたり、話し相手になったりする活動をするすることで、若者が地域の応援団になってきました。また、事業をきっかけとした新しい「縁」というものが、事業を継続すること

でどんどん広がってきました。今日のパネリスト、佐久間さん、杉崎さんは、豊根村でインターン事業を経験したことが縁で、今日お越しいただいてまして、そういう「縁」をつなげていくことが、これからの過疎地域において非常に大事になっていくものと感じています。地縁、血縁も大事なのですが、新しい「縁」づくりを20年くらい継続して取り組んできたことが、本当の成果だと思っております。

取組を続けてきたことで「とよねサポーターズ」が生まれ、さらに「とよねサポーターズ」が友達を連れて豊根村に来るということも起きてきています。それぞれ「とよねサポーターズ」となった方々が、家族を持ち、就職をして、いろいろな形での「つながり」を広げてきています。このような「縁」の広がりが、増えてきているなあ、と実感しております。

豊根村の事例は、このような新しい「縁」づくりをきっかけとして過疎地域を元気にする取組であり、そういった点が、今回評価されたのではないかと思っております。これからも、豊根村の人口は減っていくわけですが、最近では「絆」という言葉かもしれませんが、新しい「縁」を大切にしながら、地域づくりをしていきたいと思っております。

この後のパネルディスカッションでは、外部人材の活用の観点から「縁」の広がりについて少し深い議論をしたいと思います。

どうもありがとうございました。